アダムズ
主席は踊る－管楽器のためのフォックストロット

現在生きているアメリカ人作曲家の中で最も演奏される機会が多い作曲家であると言われているアダムズは、今までに舞台作品を数多く手がけている。1989年にグラミー賞現代音楽部門最優秀作品を受賞したオペラ《中国のニクソン》（1987）は、特に有名で世界各地で上演されている。彼の最初のオペラであり、ニクソン大統領の1972年の中国訪問を題材として書かれたオペラである。《主席は踊る》は、このオペラの第3幕のアウトテイクであり、オペラの1年前に初演されている。タイトルは「主席がフォックストロットを夫人と踊る」を示唆する。フォックストロットとは、アメリカの4拍子系の軽快な社交ダンスの一種で、元々はラグタイムに合わせて踊られ、後にロックンロールに合わせて踊られていた。『元女優であり毛沢東主席夫人の江青が宴会に出席する。最初、彼女はウェイトレスの邪魔になって立ち止まっている。数分後、提灯の箱を持ち出しホールの周りに飾り始める。そして、音楽が始まり、チャイナドレス姿で踊り始める。それを見て主席も興奮し始める。彼は、壁に掛けられた巨大な肖像画の額縁から抜け出して、フォックストロットを彼女と踊り始める。』と楽譜の序文に場面説明がある。実際のオペラの第3幕は、超現実的なシーンで登場人物たちが過去を回想する場面である。30年代の中国の映画音楽のような、文化大革命前の精神で若々しい主席がのちの主席夫人と踊るというイメージから生まれたとアダムズは語る。

冒頭に始まる断続的に続く音楽は、毛沢東主席と関連しており、官能的なワルツの旋律は、元女優である主席夫人を表現している。そして最後のピアノパートは、ニクソンが演奏しているのをイメージしている。フォックストロットの執拗に繰り返す旋律、リズムは、カップルが楽しく踊っている若々しい華やかさ、楽観を表現している。新ロマン主義的、かつ、パターンを繰り返すミニマルのテクニックを駆使したポスト・ミニマルのスタイルで、アダムズの洗練されたオーケストレーションにより音色の変容が楽しめる作品である。

作曲＝1985年
初演＝1986年1月31日　ミルウォーキー（ルーカス・フォスの指揮／ミルウォーキー交響楽団）
楽器編成＝フルート2（ピッコロ持替2）、オーボエ2、クラリネット2（バス・クラリネット持替1）、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、テューバ、ティンパニ、ベル・ツリー、カスタネット、クラヴェス、クロテイル、シンバル（クラッシュ、ハイハット、サスペンデッド、サスペンデッド・シズル）、ペダル・バス・ドラム、スネア・ドラム、グロッケンシュピール、サンドペーパー・ブロック、タンブリン、トライアングル、ヴィブラフォーン、ウッド・ブロック、シロフォーン、ピアノ、ハープ、弦楽5部（第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス）

アダムズ
アブソリュート・ジェスト－弦楽四重奏と管弦楽のための

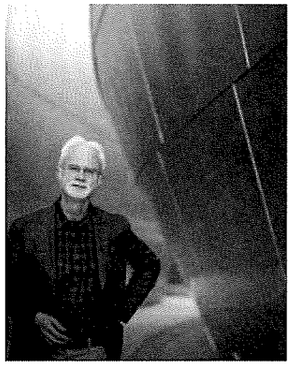
この作品は、サンフランシスコ交響楽団の創立100周年記念公演のための委嘱作品で、初演以来80回を超える再演の多いアダムズの人気作品の一つとなっている。ベートーヴェンの情熱的なエネルギーを象徴する作品の断片が、この作品の隅々に散りばめられている。アイデアのきっかけは、サンフランシスコ響の音楽監督であるティルソン・トーマスによるストラヴィンスキーの《プルチネラ》を聴いたことにより、200年以上前の過去の芸術作品を吸収し、彼独自の音楽語法で再構築され完成させたストラヴィンスキーの才能に改めて刺激されたことによる。アダムズは、初演6ヶ月後に、満足していなかった冒頭を新たに書き直している。冒頭、ベートーヴェンがスケルツォの楽章で好んで使用している付点音符が執拗に使用されているが、まるで夢の世界にいるような、柔らかい弦楽器の音色、カウベル、西洋式のスタンダードなチューニングとは異なった設定にされたハープとピアノによる神秘的な音響世界へと広がっていく。アダムズは、過去の自作の中で中世に使用されていたミーントーン（中全音律）を使用しており、その可能性に魅了されたと述べている。空間と意識が、新しいものと古いものが超現実的に共存した形で変容していく。オーケストラに対して弦楽四重奏をソロとして織り込むというユニークな編成は、セントローレンス弦楽四重奏団とのコラボレーションがあったから実現できた。ベートーヴェン弦楽四重奏曲の最晩年の傑作、op.131,135,《大フーガ》からの引用をメインに、交響曲第9番、第8番、ハンマークラヴィア・ピアノソナタ、ワルトシュタイン他、ベートーヴェンの典型的なモチーフをコラージュしている。ベートーヴェンの荘厳なエネルギー、最小限の音楽情報を最大限に生かして構築された彼の作曲技法を応用し、ベートーヴェンへの敬意を音楽で表現している。タイトルのjestは、ラテン語のgesta（様々な行為）からきている。

作曲＝2011年
初演＝2012年3月15日　サンフランシスコ、デイヴィス・シンフォニー・ホール（セント・ローレンス弦楽四重奏団の独奏、マイケル・ティルソン・トーマスの指揮／サンフランシスコ交響楽団）
楽器編成＝弦楽四重奏独奏、ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、カウベル、シロフォーン、バス・ドラム、チャイム、グロッケンシュピール、ヴィブラフォーン、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦楽5部（第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス）

伊藤美由紀（作曲家）

「アメリカ人・人気作曲家　アダムズ」

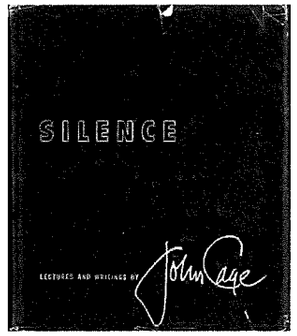
アダムズは、現在生きているアメリカ人作曲家の中で、最も演奏される機会の多い作曲家の一人であると言われている。しかしながら、彼の作品が日本で演奏される機会はそれほど多くはなく、知名度においてもミニマリストの第一人者であるスティーブ・ライヒに比べると一般的に余り知られているとは言えない。そこで、アメリカの文化に根付いたアダムズの業績、音楽観、スタイルについてまとめてみたい。



ジョン・アダムズ　Photo:Vern Evans.

アダムズの音楽スタイルは、ロック、ジャズを含むポピュラー音楽から20世紀現代音楽の多様なスタイル：ミニマル・ミュージック、新ロマン主義、コラージュ手法などを含んでおり多岐に及ぶ折衷スタイルである。また、舞台作品を精力的に手がけていることも特徴である。彼の音楽を理解する上で重要な現在に至るまでの彼の経緯を、順を追って紹介する。父親からクラリネットを学び、マーチングバンドやコミュニティオーケストラで演奏することから音楽に関わり始めた。ハーヴァード大学では作曲学部に進み、レオン・キルヒナー、デイヴィッド・デル・トレディチ他の作曲家らに師事する。同時にボストン交響楽団で代理クラリネット奏者としての演奏活動も行い、指揮者として経験も積んだ。学生時代のオーケストラでの体験が、彼のオーケストラ作品に反映されている。60年代後半、彼の大学時代は、ロックの最盛期で、ロック、ソウルミュージック、モータウンなども聴くようになる。それらの経験も、彼の作品に影響を与えている。その後、大学を終える頃、行き詰まり、ブーレーズかジョン・ケージかどちらかの道の可能性しか思いつかなく、ケージの哲学的な思考に関心を持った事により、最終的にケージを選ぶ。ポピュラー音楽に耳を貸さないブーレーズ、シュトックハウゼンらの西洋のセリエル音楽に不快感を持っていたこともある。アダムズは、アメリカ人作曲家としてポピュラー音楽は無視できない文化であると信じていた。

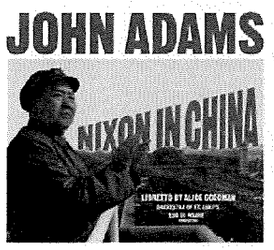
そして、ジョン・ケージの著作『サイレンス』を持って、西海岸の音楽的な自由さを求めてカリフォルニア州に引っ越す。当時、ケージはサンフランシスコの音楽コミュニティにかなり受け入られており、音大でもケージの理論についてのクラスさえ開講されていた。最初の10年間は、サンフランシスコ音楽院で作曲を教えながら、ニューミュージック・アンサンブルや学生オーケストラの指導も行った。1974年にスティーブ・ライヒのアンサンブル・ツアーによる《ドラミング》を聴いた時、その演奏の質の高さ、音楽性に魅了され、真剣にミニマリズムについて考えるきっかけとなったと語る。また、ライヒと同年代のフィリップ・グラスのオペラ《サティアグラハ》を聴いて感銘を受け、後に大成功を収めたオペラ《中国のニクソン》に影響を与えた。



ジョン・ケージ
『Silence: Lectures and Writings』
初版本表紙（1961）

その後、1982-85年の期間、サンフランシスコ交響楽団のレジデント・コンポーザーをつとめ、《アブソリュート・ジェスト》を含む5曲のオーケストラ作品が同楽団により初演されている。当時の多くの作曲家のようにミニマリズムに魅了され、更なる探求を試みていた。1981年までには、「ミニマリズムに飽きているミニマリスト」であると語っている。ミニマル・ミュージックとは、繰り返す旋律パターン、調性感のあるハーモニー、明確な拍節感のあるリズムパターンを特徴とする音楽であり、彼の後の作品では、緊張感のあるハーモニー、精巧な対位法的テクスチャーを取り入れており、初期の作品よりも表現の深さ、音響的、構造的な複雑さを増している。

1981年にサンフランシスコ響のために作曲した最初の合唱とオーケストラのための作品が《ハルモニウム》であり、この作品により作曲家として知名度を上げる。1985年には、詩人のアリス・グッドマン、舞台監督のピーター・セラーズとのコラボレーションを始める。このメンバーによる彼の最初のオペラ作品が、今月の定期プログラムとも関係のあるオペラ《中国のニクソン》（1987）である。世界各国で再演されており、彼のオペラの中で人気のある作品の一つとなっている。そして、2作目のオペラ、テロリストによるハイジャック事件を基に制作された



オリジナル・キャストによる『中国のニクソン』CD
［輸入］nonesuch：979177-2（3枚組）
エド・デ・ワールト指揮/セント・ルークス管弦楽団 他

《クリングホファーの死》（1990）と共に、政治的な内容の作品を音楽で表現することを試みている。また、ピューリッツァー賞（2003）、グラミー賞現代音楽部門（2005）を受賞した2001年9.11のニューヨークでのテロの悲劇のあと、ニューヨーク・フィル・ハーモニックからの委嘱により作曲されたオーケストラ、合唱とテープによる《魂の転生の上で》も同様である。録音されたニューヨークの街のざわめき、語りが合唱、オーケストラに溶け込み瞑想的な背景を創造し、劇的な哀悼歌である。

そして、原爆投下を描いたものではなく物理学者オッペンハイマーたちによる「マンハッタン計画」の核実験を題材とした同じくセラーズによる脚本のオペラ《原爆博士》（2005）を書き上げる。脚本は、登場人物たちの手記や手紙などの資料から抜粋されたものであり、様々な詩人による詩の引用も含まれる。オペラ的な手法で音楽により衝撃的な訴えを表現している。最後の日本語による「水を下さい」という女性による朗読も効果的なメッセージとして使われている。《原爆博士》と対になっていると言われているセラーズとのコラボレーション・オペラ《花咲く木》（2007）では、モーツァルトの《魔笛》から触発されて、インド南部の民謡に基づいて書かれている。舞台作品は、現在8作品。そのほか、今月の定期プログラムのベートーヴェンの晩年の弦楽四重奏曲を中心に断片が引用されている《アブソリュート・ジェスト》（2011）、ベートーヴェンの後期ピアノソナタ、ディアベリ変奏曲を引用した《弦楽四重奏第２番》（2014）、その作品を2台ピアノのためにアレンジした《ロール・オーヴァー・ベートーヴェン》（2014）とベートーヴェンに敬意を払って、彼の作品をコラージュして書かれた3曲の作品がある。

2009年以来、ロスアンジェルス・フィルハーモニックのクリエイティブ・チェアの地位についており、同時に世界各国の主要なオーケストラを指揮し、自作からベートーヴェン、モーツァルトのクラシック、そして、現代作品までの幅広いレパートリーで、指揮者としても人気がある。2019年には、ヨーロッパの文化、社会、社会科学への貢献を評価され授与されるエラスムス賞を受賞し、アメリカを代表する重要な音楽家の一人として現在も活躍中である。

指揮をするジョン・アダムズ
Photo: Musacchio-Ianniello-Pasqualini